中村章景追悼の頁

章景を歎く

高安吸江

章景改め五代目芝雀として、其名題適任證を協會から貰つたと、それを見せに來たおしかさんが、丁度今歸りました。

それを機會に私は、此間からボツ〳〵探して集めた章景の寫眞やハガキを整理して見やうと考へましたが、ツイ十枚位もあるかと思へば、どうして〳〵次から次へと頻に出て來るのに驚かされました。

饅頭娘に炬燵のおすゑ、遠見の敦盛、新口のお爺と珍らしい子役から、近くは十一年の鏡獅子の胡蝶、戰線から來た軍服姿まで、中々一寸には數へきれません。

實いふと數へやうとしたのですが、其一枚一枚に古い記憶が蘇へつて、胸迫る思ひに堪へ難かつたからやめたのです。

その中に特に眼についたのは大正十五年八月十四日に天下茶屋の舊宅で亡父と両人寫したのを、二日後の十六日に親子三人連でわざ〳〵病

院へ見せに來た一枚です。

庭の籐椅子へ腰かけた洋裝の雀右衛門、大患が輕快したので徐に働き出し、大分元氣づいた處ですが、小卓を隔てゝ立つ章景はヘルメットに半ズボン姿で、左に細いステッキをつき、右にはサイダのコップを取つて稍傾けた其顏には愛くるしい眼と怜悧そうな鼻、そして今にも笑出しそうな口など、純眞な平和そのものです。

凡天下に誰が此子を憎み得るでしやうかと思はれる程、實にホヽ笑ましい光景で、其前途は洋々として惠まれたものらしく考へられたのでしたが、一年餘の後には父を亡ふて既にその幸福の大半は壞れ、爾來十數年、藝事以外の樣々な苦惱に呵まれる中、終には興亞運動の礎石となつて大陸の花と散り失せました。實際わからぬものは人の一生です。

しかし考へると章景は既に生れる時から黑星が附いてゐたやうにも思はれます。

彼の誕生は丁度お母さんの四十近い頃で、九年も間があつたからよもやと思はれ、醫者も腹膜炎と誤診(?)して頻りと冷したりなんかしたと聞いてゐます。それで彼は無事に生れたことは生れたが、まるで月足らずのやうに極めて貧弱なものでした。

父は此子の行末が榮あるものであれかしと、さる人の敎から左右平等の文字を撰んで「章景」と名付けたのですが、果して何程の効力があつたでしやうか。

私が彼を知つたのは大凡五六才頃だつたと思ますが、それ以來いつも〳〵彼の强壯法について頭を惱まさねばならなかつたのです。風吹きの蒟蒻然たる歩きぶりで體操の先生に叱られ通

したのは、主として強度の斜視に因つたとは云へ、大體に於て其虚弱な體質を見ると、十五六才まで生き得られることが頗る疑はしかつたのでした。

こうした弱い子供は、通常肉體に反比例して頭の方が進み過ぎ、大人のやうなことを云ふたり、所謂コマシヤクレて小面ラ悪いものであるが、章景は不思議に其弊に陷らず、常に子供らしさを失はぬので、隨分烈しい悪戯はするが、それが却つて愛嬌となつてあまり他から憎まれません。

この幼稚さ、トボケた處、即滋味があつて、親譲りの負けぬ氣とヤンチヤ、それでまた決して馬鹿でなく中々小心で怜悧な點もあるといふかなり復雑な性質で、此等の美點を善用し眞の藝道に精進させたら少くとも水平線以上の何かゞ出來上るものと、私は心ひそかに其將來に向て望をかけてゐたものです。

ヤンチヤと云へば、此子の行く處としてそれに惱まされぬ人はない位で、例へば私の方へ來れば机上の聽診器をはじめ備品の一切を次から次へと弄んで置所をメチヤ〳〵に變更することから始まつて、ペンを取つて落書をする、呼鈴の釦を押して無暗と看護婦を呼寄せるなど〻、いつも變つた悪戯をやるのに天才的な頭腦をもつてゐました。

一番ひどい騒動は斜視の手術の時でした。此れは阪大の中村教授に御願したのですが、イザ是からといふ時に、手術臺の上でゴネ出しどうしても嫌だといふので、とう〳〵私が呼出され、叱つたりなだめたりいろ〳〵と諭してやつと一方だけ手術をうけることになりました。無論私

が傍に居て手を握つてゐなければならなかつたのです。流石の中村先生も此手術には大分手を燒かれたらしく、私もこんな經驗は他に一例あるだけです。

樂屋での惡戯は實に有名なもので、話術の巧い河内屋などに話させると實に珍妙を極めた面白いものでした。そのくせあまり憎まれぬ、イヤそれどころでなく却て可愛がられてゐました。鴈治郎にしても中車にしても皆我子以上に可愛がつてゐたやうです。

中車は島の爲朝をやつたとき、章景が紙鳶に縛りつけられて泣出し非常に閉口したそうですが、その頃から「御父上」と慕はれ、終には眼の中へ入れても痛くない程の可愛がり樣になりました。

鴈治郎が此子を好く樣になつたのには次の逸話があります。何でも九州地方へ旅した時で下關から門司へ渡る、其汽船を待合す間のことでした。床几に腰をかけると座布團が一つしか無いのに、それを京屋が平氣で敷いてゐる。座頭の鴈治郎は其隣にゐて敷ものがない。しかし別に何の氣もつかずにをつた處、當時まだ十にも滿たぬ章景が、それと口には出さずアマへるやうにして二人の間へ割込み、とう〳〵父を座布團から押出し、知らぬ顏してそれを成駒屋の方へ、敷けと云はぬばかりに押やつたのです。

口で云ふと親がテレるから惡戯のやうにして實はよく判つてやつてゐる、彼奴は中々阿呆やおまへん、親父よりエライもんだす、と何時やら鴈治郎が私に話してゐました。

父京屋の好きな鴈治郎が其子を可愛がるのは無論でしやうが、こんな事があつたので一層其

度を増したのは云ふまでもありますまい。

斯くいろ〳〵の人、殊に上役の人々の愛顧をうけたから、隨分ヤンチヤも通つた、其一例として大正十四年の十二月京の顏見世で須磨の浦に遠見の敦盛をやつた時、臺辭がないので納まらず、とう〳〵「イデヤ組まん」とか何とか一言云はして貰うたことがあります。遠見がセリフを云ふなどは恐らく珍無類であると思ます。

炬燵の勘太郎で寢込んでしまつたのを始めまだいろ〳〵と云ふこともないではありませんが、あまり長くなりそうですから此位にしておきます。

父雀右衛門は此子を俳優にする氣はなかつたとも聞きますが、其遺志を守らずして然も其通りになつたのはいかにも淋しい氣がします。

しかし弱い〳〵と云はれながらお母さんの丹精で立派に甲種合格となり、いつやら東京で輕率なお醫者から肺が惡い（？）とか云はれたのも、見事に反證することが出來て、首尾よく御國のために一命を捧げる光榮に浴し得たのは、日本男子としては此程の愉悅はあるまいと思ひます。

出發の際御所櫻の勇士三忘を訣別の辭としたが、今は軍人としての本分を全うした者と高聲に、閻魔の廳を名乘つて通れ、南無成佛得脫と大判事もどきに叫びたいと思ひます。

笹折れて雀歸らぬ雪の朝